大学院教育のこれから

牧野順四郎
心理学系教授

大学院博士課程研究科が改組再編され，6つの大研究科が出揃ったことは記憶に新しい。筑波大学が研究型大学として位置づけられたことの明確な表現である。このことはまた，これからの筑波大学が大学院博士課程研究科の教育をしっかり考えていかねばならないことを意味している。といってもそれは，これまでの研究科の教育がいいかげんだったというのではなく，もっと意識的に組織的な教育プログラムを考える必要があるという意味である。

1．大学院教育は学群とどう違うか

(1) 違わないところ

大学院学生に求められる要素は，知的好奇心，意欲，知識の3つである。そのどれが不足しても大学院学生としては物足りない。大学院に入った学生の知的能力の差は極端にいえばたかが知れているので，こっちの方がもっと重要である。これらの要素は独立ではないので，教員は総合的に見ていい学生とかいまいちの学生とかの評価することが多い。3つを伸ばすための経験的方法は，知識の教授によって好奇心・意欲をモチベートすることである。

これら3つは教員にも求められる要素である。学生に不満をもらすのは簡単だが，好奇心・意欲をモチベートする教員側に一因があることも多いようである。

(2) 違うところ

大学院学生の仕事は学群学生と違うところがある。それは研究である。研究とはある問題について，組織的，体系的，客観的，論理的に，調査を行いその結果をまとめ上げる活動のことである。最も重要なのは論理的思考であり，組織的・体系的・客観的思考の土台をなす。ただし，この思考態度は大学院で初めて訓練するのでは遅すぎる。学群時代に身につけるべき思考態度である。とかく教養教

育が叫ばれるが，雑然とした羅列的知識を授業で詰め込んでも，ほんとの教養にはならない。学群でも大学院でも，授業は問題がどこから発し，解決に向けてどんな研究がどんな方法でなされてきたか，その問題が他の研究分野とどんなつながりがあるかを知ってもらい，自分の頭で考えてもらうことに意味がある。思考が稚拙であっても一向に構わない。教員はなぜ稚拙であるかに答えればよい。

注意すべきは，研究の主体が教員ではなくて学生であることである。確かに教員は研究の指導をする。しかし，最終的には学生はプロの研究者として自立しなければならない以上，研究課題が教員のものであっても，それは学生の自立のための指導であって教員の実利（のように見えても構わない）だけのためではない。

2．大学院の教育の特徴

大学院の教育は研究と不可分である。学生はプロの研究者として自立するため研究の実践が求められるが，そのときに教員の指導が不可欠だからである。文系理系を問わず，どんな研究にせよ，研究課題について，問題の背景，研究の過去と現在などを自分の足で調べ，具体的な研究目的をたてることから出発し，最適な方法は何かを決め，実際の調査・実験を行い，結果を分析し，調査・実験を評価し，何が未解決問題として残されたかを考え，次の実験・調査を計画する，という点で共通している。大学院ではこれらすべてを学生が身をもって実践しなければならないことが重要である。

指導教官の仕事は明らかである。かれらはプロとしての豊富な知識（経験）をもって学生の研究活動に必要な具体的な示唆や技法を，身をもって（手取り足取り）教え込まなければならない。実験はなくとも，立論の正しさ（問題の立て方），用いる方法の適否，方法と結論の整合性，残された問題の指摘など，文系の研究でもまったく同じである。むしろ実験法のように確立された方法が定まっていない，あるいは定めるべきではない文系研究においては，指導教官の問題への視点および組織的・体系的・客観的・論理的思考が決定的に重要になるので，手取り足取り指導は理系研究よりも重要さを増す面がある。文系研究の困難さは，実験法のように結果から自分の考えの否定と考え直しというプロセスが当然の理系研究に比べ，教員個人の視点や知識の解釈の伝授の色彩が濃くなり，学生の視点・方法の斬新さ（前例のなさ）を評価する態度に欠けがちになることであ

ろう。

3．新しい大学院教育とは

(1) 教育課程

従来の大学院教育は，内容において間違っていたわけではないが，学群教育にくらべ明らかに組織だっていなかったことは確かである。しかし，これからの大学院教育には組織だった教育プログラムが必要なことは明らかである。なぜなら，大学院は学生の学位取得を主要な目的とすることをもっと明確に自覚して研究教育を行わなければならない時代にきたからである。それにはまず，必要な知識は何かを整理し，大学院学生に叩き込むべき事柄を絞り，それを何年次に何を教えるかまで組織立てることが必要である。要は，大学院学生をプロの研究者として自立できるように組織的に訓練するという視点をもつことである。

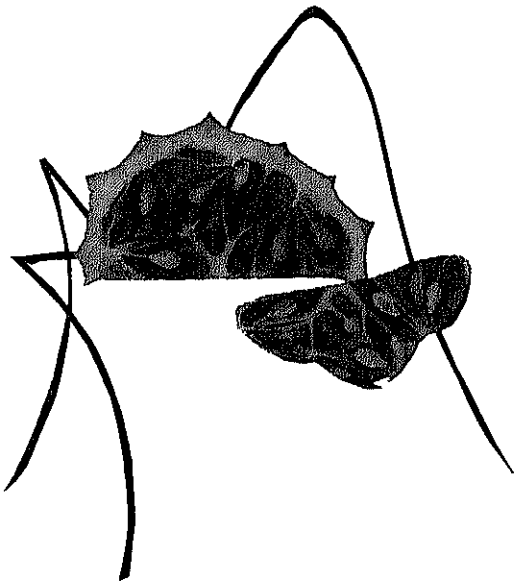
(2) 断的視点と知識

専門バカという言葉がある。個人的にはそれが嫌いではないのは，高度に先端的研究には必要な態度だからであり，深く突っ込む姿勢は研究の基本態度でもあるからである。しかし，この態度だけで一生押し通していくのは無理であることもまた明らかである。それは問題に対する視点の転換を困難にする。いいかえれば，発想の転換から創造的視点や新たな研究を産むきっかけを奪うからである。

最初から多角的視点が必要な問題もある。それは人間の研究である。特に，人間の心身の諸問題の解決を念頭におく場合には，専門バカはありえない。人間の諸問題がひとつの解決法で済ませられれば結構だが，それが見つかっていない今，人間の諸問題について生物身体的，教育福祉的・精神文化的３視点を常に念頭におく態度が最初から必要である。それを目指した研究科が人間総合科学研究科である。教育学・心理学・心身障害学・医学・体育科学・芸術学が共に人間の心身問題研究に結集し，研究科はいま横断的視点の重要性をどのような形で大学院教育に盛り込むかについて論議を進めており，新たな学際研究の創出を目指している。

4．大学院教育は不変

組織だった教育プログラム・複眼的視点はこれからの大学院教育のポイントである。しかし何が大学院の本質かを問われれば，プロの研究者として自立できるための訓練（教育）を徹底して行うこと，がそれであると答えよう。それに必要な作業はすでに述べたとおりである。教員は，学生の研究計画とその遂行に必

要な知識と技法を徹底的に叩き込み，一人前の研究者に仕立て上げるのが仕事である。この仕事はこれまでと何ら変わりがない。たとえ研究科の名前が変わろうが，斬新なデザインの新研究棟ができようが，大学が独立行政法人化しようが，大学院の研究の指導と教育の本質が変わるわけではない。われわれはこれまで通りやるべき仕事をやるだけである。

（まきのじゅんしろう　感性認知脳科学専攻）